

2020 年 3 月 22 日（日）「人生のエルサレムを目指して」

使徒 20:17-38

17 パウロは、ミレトからエペソに使いを送って、教会の長老たちを呼んだ。18 彼らが集まって来たとき、パウロはこう言った。

「皆さんは、私がアジヤに足を踏み入れた最初の日から、私がいつもどんなふうにあなたがたと過ごして来たか、よくご存じです。19 私は謙遜の限りを尽くし、涙をもって、またユダヤ人の陰謀によりわが身にふりかかる数々の試練の中で、主に仕えました。20 益になることは、少しもためらわず、あなたがたに知らせました。人々の前でも、家々でも、あなたがたを教え、21 ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰とをはっきりと主張したのです。

22 いま私は、心を縛られて、エルサレムに上る途中です。そこで私にどんなことが起こるのかわかりません。23 ただわかっているのは、聖霊がどの町でも私にはっきりとあかしされて、なわめと苦しみが私を待っていると言われることです。24 けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。

25 皆さん。御国を宣べ伝えてあなたがたの中を巡回した私の顔を、あなたがたはもう二度と見る事が出来ないことを、いま私は知っています。26 ですから、私はきょうここで、あなたがたに宣言します。私は、すべての人たちが受けるさばきについて責任がありません。27 私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。

28 あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。29 私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中に入り込んで来て、群れを荒らし回することを、私は知っています。30 あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。31 ですから、目をさましていなさい。私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがたひとりひとりを訓戒し続けて来たことを、思い出してください。32 いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばとにゆだねます。みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中にあって御国を継がせることができるのです。33 私は、人の金銀や衣服をむさぼったことはありません。34 あなたがた自身が知っているとおりの、この両手は、私の必要のためにも、私とともにいる人たちのためにも、働いて来ました。35 このように労苦して弱い者を助けなければならないこと、また、主イエスご自身が、『受けるよりも与えるほうが幸いである』と言われたみことばを思い出すべきことを、私は、万事につけ、あなたがたに示して来たのです。」

36 こう言い終わって、パウロはひざまずき、みなの方とともに祈った。37 みなは声をあげて泣き、パウロの首を抱いて幾度も口づけし、38 彼が、「もう二度と私の顔を見る事が出来ないでしょう」と言ったことばによって、特に心を痛めた。それから、彼らはパウロを船まで見送った。

【序論】

長い間、時間をかけて、D. ワングの『最後まで走り抜け』から節目節目に語ってまいりましたが、このテーマも今回で最後になります。今週、私たち一家は例年よりも長い休暇をいただきましたので、教会の皆様への感謝の思いを込めて語らせていただきます。人生の終りとはいつ訪れるか分からないものですから、私たちは如何なる時にも主とお出合いする備えをしていなくてはなりません。それと同時に、地上のすべてのものとの別れの可能性も常に念頭に置いておくべきでしょう。もちろん元気に戻ってくるつもりではおりますが、何かがあった場合に残された方々が困ることのないよう、毎度遺言を書き残すようにしています。そして、そういう作業をしておりますと、この人生をもっと整理しておかなくてはいけないことに気づかされるのです。

【本論】

使徒 20:17-38 は、エペソ教会の長老たちへのパウロの告別説教という有名な箇所です。3年間その地の開拓伝道に励んできたパウロですが、その教会を次の責任者に委ね、自分は次なる場所（エルサレム）へと向かって行きます。自分が始めた働きを、言わば振り切るようにして、彼は先へ進んでいく。そこには彼のどのような思いがあるのでしょうか。

本論 1. エペソでの 3 年間の働きの回顧

少し文脈をお伝えしておきますと、この箇所は 18:23 から始まった（～21:26）パウロの第三回伝道旅行の途上の出来事です。この伝道旅行の目的地はエルサレムであり、彼は困窮するエルサレム教会への異邦人教会からの献金を届けようとしているようです。20 章前半を読むと、彼がマケドニヤ、ギリシャ、トロアス、アソス、ミテレネ、キヨス、サモス、ミレトという順に移動してきたことが分かります。そして、このミレトの地から使いをよこしてエペソの長老を呼び寄せました。エペソでは大女神アルテミスをパウロが冒瀆したという噂から大騒動が巻き起こったという経緯がありますので（19 章）、パウロはその地に近づくことを避けたのでしょう。ミレトからエペソまでは陸路で 60km あり、往復の道のりを考慮すると 3 日を要したと言われています。

「長老」という役職はユダヤ教的な表現ではありますが、彼らは教会の「保護者」であり、28 節では「監督」と言い換えられています。群を霊的に養い、危険が迫ってい

ないかどうかを注意深く見張り、教会に仕える。パウロは3年かけて彼らを主への奉仕者として育ててきたのですが、私は12年の牧会人生を振り返るときに、3年という期間で次に教会を担える器を育て上げるのは、並大抵のことではないと感じます。彼らは少なくとも3年以内に福音を知って救われた人々であり、受洗後驚異的なスピードで群の養い手にまで成長しているということになる。パウロは徹底して弟子訓練を行ない、たとえ牧師である自分がいなくなっても持ち堪える教会を築き上げたのです。そして、彼らの手に教会を委ねた後も、これまでに伝達してきた福音が広められ、ますます教会が成長していくという確信に立っていました。パウロがいなくなったら瞬く間にしぼんで行ってしまう教会ではいけないのです。

パウロは自分がどのように教会形成をしてきたかを振り返ります。その牧会姿勢は19節の中の3つの単語によって要約されているでしょう。「謙遜」「涙」「試練」です。「謙遜」とは自分のためには何も要求しないということ、「涙」とは救われた人々を深く思いやる心、「試練」とは命の危機に晒されながらも働き続けてきたことです。更に、場合によってはすんなりと受け入れられないことであっても、聞き手に「益になること」は恐れず、躊躇^{ためら}わずに伝えてきたと言います(20節)。これは伝道者・牧会者の一番つらいところかもしれません。言いたくないことであっても、主に示されることは言わなくてはならないときがあるからです。自分が嫌われるのではないかという恐れを抱くこともある。それでも、神のことばによって教会を立て上げるためには、自分の思いを捨てて語らなくてはならない場面があるのです。26～27節でパウロが言っている事柄には、そのような意味があるでしょう。

ですから、私はきょうここで、あなたがたに宣言します。私は、すべての人たちが受けるさばきについて責任がありません。私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。

これは、まさに預言者エゼキエルが経験した苦悩です。神はエゼキエルに、ある地に神の審きが下ろうとしているとき、見張り人が警告の角笛を吹き鳴らしたのにそれを聞かなかったならばその血の責任は民の側にあるが、角笛を吹くのを怠ったならばその血の責任は見張り人にあると言われました(エゼキエル33:1-6)。パウロはそのような意識をもってエペソの町で福音を宣べ伝え、教会の倫理性を整えるために厳しいメッセージを語ってきたのでしょう。

このように心血注いで育ててきた教会は成長し、パウロにとってその信徒たちは誇りでありました。教会は時として、牧師の誇り、牧師の生きがいそのものとなり得ます。それは一面当然のことでありながら、一方において危険と隣り合わせでもある。それは、教会が「牧師の教会」「～先生の教会」となってしまう危険性です。

本論 2. エルサレムへ向かう意味

教会が牧師の占有物と化すケースは、残念ながらよくある話です。そして、怖いのは当の牧師自身がそれに気づかないことです。

パウロが敢えてエペソを離れてエルサレムへ向かおうとしているところには、彼が自分の業績や名誉に執着していなかったことが現れているでしょう。彼にとって、教会は「神のもの」だったのです。また、彼の人生も「神のもの」でした。彼にとって教会形成は確かに使命でありましたが、それ自体がゴールなのではなく、より重要なことは「主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務」でした。そのためには、示される所どこへでも進んで行かなくてはなりませんでした。

けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。 (20:24)

私たちは一つの目的を目指していたはずなのに、付随する様々な物事に腐心するあまり、目的を見失ってしまうことがあります。当初は「主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務」を目的としていたはずが、いつしか「俺の教会」に執着しているということがあるのです。この本の中には、目的と手段が入れ替わってしまう皮肉な事例が挙げられています。

「ある町を攻略する任務を受けた陸軍大佐の話があります。その町は丘の上にあり、戦略的には戦場の中心に位置していました。彼の任務はとても重要であると告げられていました。もしその町を攻略できれば、その戦いに勝つことができたのです。その大佐は町に向かって出発しました。その途中で、大佐と兵士たちは、大きな沼のそばで停止しました。その町に行く唯一の方法は沼地を通して行くことでした。彼のその部下は、その沼を渡れるようにし始めました。流れをせき止めて、土で沼を埋め排水していきましました。彼らの仕事は、何日も何週間もまた何カ月もかかりました。その間、力を奪われる天候とも戦い、人食いワニやマラリヤ蚊とも戦いました。何カ月もの重労働ののちに、ついに沼は土砂で埋め尽くされました。大佐は本部に伝令を送って、『任務完了！』と伝えました。もちろん彼の任務は沼を埋めることではなく、町を攻略することにあります。沼を埋めることは、目的を達成するための手段にすぎませんでした。しかし、私たちの多くは手段のことで手一杯になって、目的を忘れてしまいます。私たちは事を行うのに忙しくなりすぎて、何のためにそれらのことを行なっているのか忘れてしまいます。私たちは沼を埋めるのに忙しくなりすぎて、初めの任務が町を攻略することであつたことを忘れてしまうのです。」 (pp. 222-223)

パウロは自分の真の使命に向かって行くためには、エペソ伝道という人生の章に幕を下ろさなければなりませんでした。しかし、それは無責任に放り出すということではありません。しっかりと教会の基盤を築いた上で、自分と同じ働きができるようになった人々に託すということです。もし教会がまだその段階に達していないのであれば、牧会者の使命はまだ達成されていないと言えるでしょう。

これは牧会者だけに特化される話ではありません。人は誰もその人生で築いてきた何かがあります。それが立派であればあるほど、手放しがたいものとなるでしょう。しかし、神の目的のために移動すべきことが心に示されているとき、手放さなくてはならないものが出てきます。所有物、そして人間関係です。その人間関係が愛によって結ばれていればいるほど、手放すのはつらく感じるでしょう。しかし、今握りしめているものをいつまでも握り続けていると、せつかくの良い働きそのものが台無しになってしまうかもしれません。なぜなら、その人にとってその「良い働き」が「名誉」という名の「偶像」に様変わりしているかもしれないからです。

本論 3. 残される教会の担い手

パウロの生き方は、自分の働きを「神のもの」とし続けた模範と言えます。彼の中で、この先エペソ教会がどのような試練に晒されるか、不安要素がなかったわけではありません。

**私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中に入り込んで来て、群れを荒らし回ること
を、私は知っています。あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟
子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。(20:29-30)**

教会の内外から、攻撃の手が及んでくるということです。それは、パウロを殺害しようとしたユダヤ主義の人々のことか、あるいはエペソの土着の宗教を信じる人々によってか、あるいは異端的な教えが入り込むことか。そのような事態に晒されることを知っていながら、パウロは去って行くのです。それは、エペソ教会を守っていくのは、彼が3年間信仰教育を続けてきた長老たちであり、彼らにはそれができるという確信があったからです。そして、より根本的には、神のことばが教会を守り続けることを彼は知っていました。教会とは人間の言葉によって立っているのではなく、ただ神のことばを土台としているのです。

**いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばとにゆだねます。みことばは、あなたが
たを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中にあつて御国を継がせることができる
のです。(20:32)**

現在、日本の教会は後任を立てるということ自体が難しい時代になってきています。献身者が少ないのです。ところが、その反対に、後任が与えられているのに、前任がいつまでも退かないことによって、後任が潰されていくという悲劇も起きています。どうしてこういうことが起きてしまうのか。それは偏に、いつまでも人生の山の頂上に居続けたいという人間の欲望ゆえでありましょう。

「登山家の中にあっても、エド・ヴィエスターズのような人は希です。彼はエベレスト山の14の頂上すべてを登頂し、他の人たちとは際立っています。他の登山家たちと異なり、彼は酸素ボンベの助けを得ることなく登頂しました。しかし、彼は無謀で命知らずの人ではありません。1987年のこと、彼は頂上からわずか350フィートの所で引き返しました。登山用のロープはなく、暗闇が迫っていました。『頂上に向かうのは、選択によるが、下ることは必須だ。多くの人々は頂上のことだけに気を取られているが、下山のことは忘れている。』と彼は言いました。」(p. 218)

私たちの人生を登山に例えるならば、自分は今、山のどの辺にいるのかということ、ある程度客観視できることが望ましいでしょう。あるいは、マラソンで言えば、往路と復路に例えることができるかもしれません。働きに就く前の青年ならば、人生の往路にあると言えるでしょう。中年の脂の乗った時期を過ごしている人は、山の頂上にいるかもしれません。若手が育ってきて、多くの仕事を任せられる段階に来ているならば、折り返し地点と言えるか。そして、引退して第二の人生を歩み始めている人は復路にあると言えるでしょう。多くの人の目が行きやすいのは往路であり、山を登り切ることをそれ自体を目的としてしまっているかもしれません。しかし、著者は言います。むしろ、気をつけなくてはならないのは復路であると。山から降りるときにこそ事故は起きやすいのです。そして、体が弱り、思い通りに動けなくなった時期をどう乗り越えていくかが、人生最後の課題となります。既にその時期を過ごしておられる方にも、「人生のエルサレム」があるのです。つまり、「神の目的」をどんなときにも見失わないでいたい。神の目的とは、「主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務」であって、私たちがこれまでに築いてきた業績や名誉にしがみつ়くことではありません。

登山には「午後2時のルール」というものがあるそうです。「午後2時までに頂上に到着できないならば、たとえ頂上が目に見える所にあっても、引き返しなさい」というものです(p. 232)。私は自戒としてこのことを心に刻んでいます。私にも達成したいことがこの人生には多くあります。しかし、ある時に「これ以上は体力的・能力的に無理だ」と思う瞬間が訪れるのではないかと想像しています。そのときに、山を降りる備えが自分にできているかどうか問われているのです。新たな人生のページをめくりなさいと主が語っておられるとしたら、前のページを潔く閉じることができるように。

【結論】

長い期間、『最後まで走り抜け』のテーマ説教にお付き合いいただき、感謝いたします。これは、私が牧会者として道を踏み外さないためであるとともに、一人ひとりの人生にも形は異なれど同じ課題があると信じているからです。ご紹介した『最後まで走り抜け』の他に、『坂道を前に 人生を走る人への声援メッセージ』（吉持章、いのちのことば社、2018）もお奨めします。今一度、自分が今、人生という山のどの辺にいるかを見つめてみたいと思うのです。そして、それにふさわしい歩みができればと願います。いずれにしても、「主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務」という目的は変わることがありません。その任務の形は、人生の行程とともに少しずつ変わっていくのです。

【祈り】

一人一人にかけがえのない人生を与えてくださっている天の父なる神様。与えられている時間は限られており、能力にも限界があります。その中でどのように生きるかが問われております。救いにあずかった私たちには、「主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務」という目的が常にあります。その目的を見失うことなく、人生の各ページを立派に歩ませてください。それはどの年代の人にとっても重要な、神への責任であります。2019 年度も残りわずかですが、一人一人が主の前に自らを整えて締めくくることができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

各々の人生にご自身の尊い目的を与え、進むべき道を示し給う、父なる神の愛。

救いを受けた者に、福音を証しする任務を託し給う、主イエス・キリストの恵み。

人生のどのようなページにあっても、ゴールを明確に見据えさせ給う、聖霊の親しき交わりが、

我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。

